

コロナ禍における牛内臓肉の需給

主任研究員 長谷川晃生

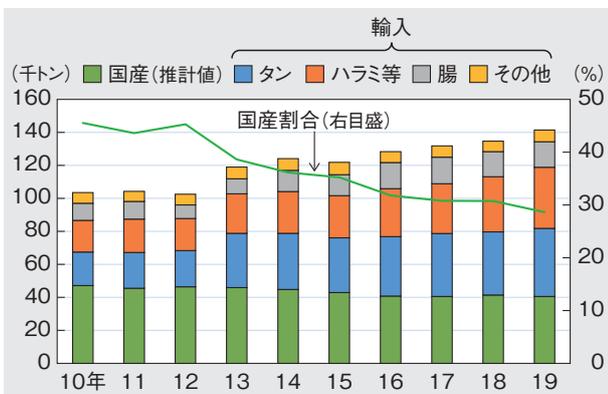
コロナ禍でのインバウンドを含めた外食需要の減少等により、2020年3～4月にかけて和牛枝肉の価格は大きく落ち込んだ^(注1)。その後、相場回復の兆しがみられるものの、コロナ禍の長期化が見込まれるなかで、外食向け畜産物の需給動向が注目される。

そこで、焼肉店等の外食が需要のメインとみられる国産牛の副生物(内臓肉)について、輸入を含めた供給の変化を踏まえながら、コロナ禍の動向を分析する。

1 需要拡大期は輸入がカバー

最近の可食内臓肉の国産生産量(推計値)と輸入量をみたのが第1図である。国内供給量(国産と輸入合計)は、12年までは10万トン程度であったが、13年から増加し、19年は14万トンとなった。国内景気が復調するなかで起きた肉ブームによる需要拡大と訪日外国人によるインバウンド消費が主因で、焼肉店の売上高

第1図 牛内臓肉の国内生産量、輸入量



資料 財務省「貿易統計」
 (注) 1 輸入量および品目区分は野田・小林(2018)を参考に集計。ハラミ等にはサガリ等を含む。
 2 国産は、日本畜産副産物協会公表の推計方法と同様に、1頭当たりの牛の可食内臓肉を39kgとし、成牛と畜頭数を乗じた推計値。国産割合は、各年の輸入量と国産の合計を供給量全体と仮定し、国産(推計値)を除いて算出。

は12年から前年比増加が続いてきた(第2図)。

内臓肉は生体を枝肉へ処理する過程で分別される。したがって、国内生産量は、国産牛のと畜頭数と連動し、と畜頭数が伸びないなかで、ほぼ横ばいで推移してきた。

需要増をカバーしたのは輸入で、輸入量は12年の5.6万トンから19年の10万トンへと大きく増加した。19年の輸入品目は、タンが全体量の41%と最も多く、次いでハラミ等(37%)、腸(15%)の順で、焼肉店で代表的なこれら品目が9割超を占める。

輸入増加に伴い供給量全体に占める国産割合は12年の45%から19年の29%まで低下し、輸入依存が高まった。品目別にみると、タン、ハラミ等は、以前から国産割合が低く、直近年のタンの割合は4%と推計される^(注2)。

焼肉店が好調ななかで、国産は品質面で輸入よりも引きが強く、全般的に品薄感があり、東京市場の内臓肉(和牛・交雑)の仕切り価格は、12年の30円/枝肉kgから19年の45円/枝肉kgへと上昇した^(注3)。

2 コロナ禍の動向

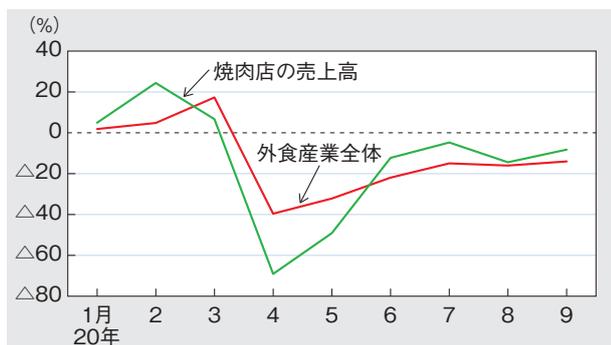
コロナ禍で、主たる仕向先である焼肉店の

第2図 焼肉店の売上高の前年比増減率



資料 日本フードサービス協会「外食産業市場動向調査」

第3図 コロナ禍の焼肉店の売上高の前年比増減率



資料 第2図に同じ

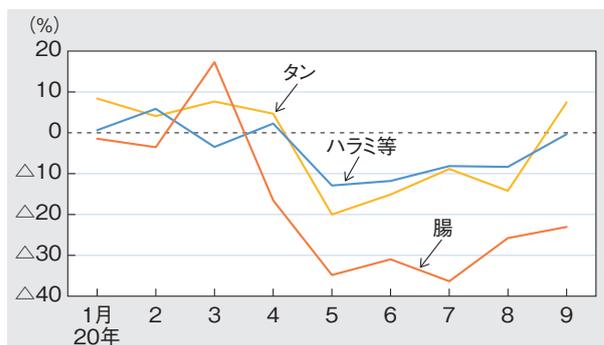
売上高は、4月、5月に急減した(第3図)。大手食肉卸によると、緊急事態宣言下でタン、ハラミ等の需要が一時的に消失したという。これを受けて、東京市場の価格は4月20日に、25円/枝肉kgへと下落した。

6月以降、外食が営業再開するなかで、焼肉業態は店舗内の換気が比較的効くため、ファミリー層の利用回復が進み、売上額の減少幅は外食産業全体に比べると小さい。また東京市場の価格も7月からは35円/枝肉kgへと好転している。

ただし、大手食肉卸によると、外食は前年水準までの売上回復が遅れ、肉食向けの引き合いも限定的なため、とりわけ白もの(腸、胃等)は、例年に比べて在庫量が多いという。

こうしたなかで、肉食向けの販売拡大を目指す動きもある。国産内臓肉を専門に取り扱う九州地方の食肉販売業者は、これまで外食・量販店向けの販売のみであったが、8月から独自店舗での消費者向け販売を開始した。同社によると家庭内での焼肉や庭先でのバー

第4図 コロナ禍の牛内臓肉の輸入量の前年比増減率



資料 第1図に同じ

ベキューの機会が増えたことで、販売が順調とのことである。販売に当たっては、不慣れた品目の調理方法を購入者にアピールすることが重要とし、店頭での説明だけでなく、SNSを通じた情報発信を積極的に行っている。

3 国の需要喚起に期待

輸入状況は、5～8月にかけて輸入上位品目の全てが減少したが、9月にタンは増加に転じている(第4図)。

したがって、全体的な需要急減を輸入縮減で調整することで、品目別に違いはあるものの、国内の需給バランスがおおむね維持される方向にある。さらに、足元での「Go To Eat キャンペーン」の実施で、焼肉店での需要回復が見込まれ、国産の在庫解消を期待する食肉販売業者もいる。

新型コロナウイルス感染症の状況によっては、今後とも需要が変動することが懸念される。短期的な生産調整が難しいなかで、どのように需給バランスが図られるのか、今後とも注視する必要がある。

<参考文献>

- ・野田圭介・小林誠(2018)「米国の牛内臓肉の生産・輸出動向～タン・ハラミを中心に」『畜産の情報』7月号
- ・長谷川晃生(2020)「コロナ禍における和牛需給の変動」『農林金融』9月号

(はせがわ こうせい)

(注1)詳細は長谷川(2020)を参照。

(注2)国産割合について、ハラミ等は野田・小林(2018)では農林水産省によると約10%としている。タンは、日本畜産副産物協会が公表している1頭当たりの可食重量(1.65kg)を、成牛と畜頭数に乗じたものを国産数量とし算出。

(注3)価格は枝肉重量により異なり、文中では枝肉重量が510kg未満を例示している。